## 仏教が生まれた土地インド:出張講義を終えて

国際交流委員会 委員長

東京工業大学物質理工学院, 教授 富田育義

国際交流委員会 委員

北九州市立大学国際環境工学部, 教授 櫻井和朗

シンガポール・チャンギ国際空港を20時に離陸した 搭乗機は、インド洋ベンガル湾の上空をほぼ真西に飛 行してインドのTrivandrum (トリバンドラムもしく はティルヴァナンタプラム)に向かっている。夕食の サービスが始まると機内は香ばしいカレーの香辛料の 香りに満たされた。「日本のカレーはビールに合うけど インドのカレー合わんわ」と文句を言いながらも出さ れた物はすべて食べてしまう。ターバンを頭に巻いた 人、ヒンズー教徒の印であるおでこに赤い点をつけた 人がいる。皮膚の色も骨格も筆者らモンゴリアン系の 人とは明らかに違う。第5回のアジアショートコース (ASC) は1月31日から2月1日に古代文明の発祥の地 であるインドで行うことになった。Trivandrumにある 国立研究所学際科学研究所のMaterial Science Division (National Institute for Interdisciplinary Science and Technology: CSIR-NIIST) のBhoje Gowd先生に今回 のホストを引き受けていただいた。豊田工業大学の田 代研究室で2年間博士研究員をされた知日家である。 アジアの国を訪れると、学生かポスドクとして若い時 期の数年を日本で過ごして、それがキャリアアップの 大切な時期であったと熱く語っていただける方がいる。 本当にありがたいことである。このような日本ファン を増やしていくことが本当の国際交流であるし、日本 の存在感をアジアで高めることになると思う。

Kerala州のTrivandrumという地名は初めて聞いたので地図で調べてみると、赤道に近いインド亜大陸の南端にあるアラビア海に面した街である。綺麗なビーチで有名なリゾート地らしい。



**図1** Trivandrumのインド亜大陸における位置とビーチの写真 (Google より)

今までのASCは高分子科学の基礎を学部4年生のレベルに合わせて教えることをしてきた。しかし、基礎的なことを講義するだけではどうしても物足らず、数式や化学式満載のスライドを見せてしまうのは研究者の悪い癖である。そこで今回は、教育コースのASCと最先端のサイエンスを議論するシンポジウムを抱き合わせた2日間のプログラムとした。

訪問先のCSIR-NIISTには、本来博士課程以上の学生 と研究者しか在籍しないそうであるが、ASCの趣旨を あらかじめGowd先生にお伝えした結果、近隣の大学 からの学部生30名を含む120名を聴衆に集めていただ いた。初日のASCでは、CSIR-NIISTのDirectorのA. Ajayaghosh 先生や中條会長ら登壇者全員で灯明(?) に 明かりを灯す厳かな開会の儀式が執り行われ、中條会 長からSPSJの紹介に続き「高分子とは何か」の講義が 行われた。難燃性のポリイミドにライターで火をつけ ても燃えないことを実演されたときには会場から驚き の声が上がった。その後、中先生(京都工繊維大)と冨 田 (東工大) が高分子合成、高分子反応、機能性高分子 の基礎を、インド側のKuruvilla Joseph 先生 (国立航空 宇宙技術研究所: IIST) が複合材料、Bhoje Gowd 先生 がブロック共重合体に関連する高分子物性の講義を担 当された。最後にMartin Vacha先生(東工大)が高分 子のナノ物理の入門コースを話された。ご存知かもし れないが、インドの方は納得すると首を横に振る習慣 をもっておられる。日本側の講師はこれになれるまで 沢山の聴衆が自分の話に疑問を抱かれているのかと少 し不安に感じる一幕もあったが、講義はとても好評で



図2 右からインド高分子学会会長 Ramakrishnan 先生 (Indian Institute of Science, Bangalore), Bhoje Gowd先生, 中條会長, CSIR-NIISTの Directorの A. Ajayaghosh 先生 (専門は超分子化学)

あり、休憩時間には質問への回答におわれ、また帰国後も講義で使用したパワーポイントを送って欲しいとの依頼があったほどである。高分子の基礎コースという企画は、ある程度高分子科学の教育が行われている国でも必要とされていることを認識できた。ぜひ、英語の入門書を作りたいものである。

2日目はシンポジウムである。会場に行くとBhoie 先 生が「今日はストライキで交通機関が止まっている」と 言われる。そんなに困っている様子ではないが、普段 ならどこにでもいて声をかけてくる3輪タクシーがいない。 車の騒音が消え今朝は町中が静かだった。法学部の学 生と地元の政党が緊密な関係にあって、その右派の学 生が何かの待遇改善でストライキを打っていると言う。 日本で起こったら間違いなく主催者は青くなる場面で ある。そんな中30分くらいは遅れたのだが、ほとんど の聴衆が会場に到着してくれた。インドと日本から30 分の招待講演が7件と、博士課程の学生による10分の 講演が7件あった。また、学生のポスター発表が24件 あった。学生の講演は、いずれもきわめて内容が濃く、 サイエンスとしても高いレベルにあった。研究内容は、 薬物運搬用のナノ粒子、太陽電池、コンポジット中の 高分子の結晶化、セルロースナノファイバーなど最先 端の分野で、発表されている論文はいずれもインパク トファクターの高いものであった。

白熱した質疑応答があったため予定より1時間近く 遅れて終了した。さあ、喉も乾いたから泡の出る麦茶 で反省会かと思ったら、その日はDry Dayであるとの こと。インドでは毎月1日が給料日でお金を家に持っ て帰らないでお酒に使ってしまう人がいるので、1日は お酒の販売を政府が禁止しているとのことである。そ れでもと、ルームサービスで持って来てくれとしつこ



図3 ポスター発表の様子

く食い下がったが "I am sorry" と言われるだけだった。 冷蔵庫の中には生ぬるいペットボトルの水があるだけで、 講師の某先生などは、いまにも発狂しそうだったので、 名前は公開できないがインド側の大物の先生にビール のルームサービスをお願いした。すると、先ほど、巌 として断っていたボーイさんが、厳重に紙で包んだ箱 でビールのルームサービスをしてくれた。

インド側の先生と話をすると、自然とお互いの文化や習慣の違いの話題になる。日本の仏教はインドで生まれてはるか東の果てまで中国や韓国を通じて伝わってきたこと。"輪廻転生"は仏教で大事な教えだが、現在のインドのヒンズー教でも同じ教えがあることなど、化学の英語ならなんとかなるが、仏教の話になると途端に怪しくなる。Vacha先生が、ドイツ語とヒンディー語の間に多くの共通点があること、同じ種類の言葉として分類されていることなどを話された。国際交流とは、自国の文化をキチンと英語で説明できることだと、改めて認識させられる。インドの人々は、古いインドの言語であるサンスクリット語を誇りにしておられ、日本の仏像に彫られている梵語(ほんご)は実はサンスクリット語で、それを日本で見つけて驚いたと言っておられる。

最後に、今回のASCとジョイントシンポジウムの2日間のプログラムはとても良かった。学部生から高分子を専門とする研究者に至るまで、高分子の基礎について合成から物性までを俯瞰するコースと、これに立脚した最先端の研究を肌で感じることができるこのような機会はきわめて大切であるとして、お開きとなった。



図4 ポスター賞の表彰式



図5 全体写真